

医療制度崩壊

75歳のお誕生日おめでとうございます。

あなたは今日から、昨日まで受けていた治療が受けられなくなります。

昨日まであなたは、「血圧はここ」「パーキンソンはここ」「腰の痛みはここ」「皮膚病はここ」といった具合に、それぞれ専門の医療機関にあなたの意思で自由にかかることができました。

しかし今日からあなたは、どんな病気であつても1人のかかりつけ医に相談し治療していただくことになります。あなたが自由により医療機関を選ぶことはできません。

また、あなたは残念ながら、いずれ最後の時を迎えなくてはなりません。そのときをあなたは病院でなく、ご自分の家で迎えることを強制されます。

現代の赤紙・それは75歳になるあなたに送られます

あなたが最後の時を過ごす部屋が、場所がありますか。あなたの面倒をみてくれる家族はいますか。

あなたの面倒を見るために、家族の人が会社を辞めたり自由に外出できなくなってもよいのですか。

今お話したことが来年4月から現実になろうとしています。

それが「後期高齢者医療制度」です。

75歳を数ヶ月後に控えたある日、あなたにこの制度にもとづく「医療証」が送られてきます。それまでの保険証は使えなくなります。

まさにあなたとあなたの家族の幸せを破壊し、あなたのいのちを国に差し出せという、現代の「赤紙・徴兵令状」です。あなたはこれによつて姥捨て山に連れていかれるのです。

今まで国のために働いてきたあなた及びあなたの家族の生活を破壊しかねない「後期高齢者医療制度」の成り行きに注目して下さい。

於曾能 正博氏 記事転載

「医療と教育」は社会的共通資本であり、人間が人間らしく生きるために最も大切なものである

日本学士院会員 宇沢弘文の言葉



今年、年明け間もないある日、小松院長（現理事長）から「日本の、国民の医療を救う為に、俺は忙しくて手が回らないから、星先生、NHKで膝の話でもやってくれ！県医師会の順番だから」と。従順な体育会系の私は、間髪を入れず「はい、わかりました」と。

さて、どんな番組で、何をやるんだろうかと不安に思っていた所、小松先生が以前に腰痛の話でご自分が出演されたビデオを渡してくださいました。これで、NHK デジタル放送の『とことん健康』という番組で、生放送という所までわかりました。ビデオでは美人のアナウンサーと対話形式で話を進めて行くようで、いつもより小松先生は舌が滑らかな印象でした。加えて外来で余り見たことのない腰痛予防の注意点や体操などを実演しながらやっていて、へえ～、こんなことまでやらなければならないのかと、元来口下手で、気の弱い私はビビリ始めたのでした。

本番2週間程前に、NHKからテーマ、膝に関するチェック項目など具体的な内容の問い合わせの文書が届きました。このチェック項目にデジタルTVを見ている視聴者を参加させるのが番組の目玉のようで、これだけ症状があったら赤信号、黄信号などと決めるようでした。私の場合はおかげさまで、小松整形外科医院の日常外来で、膝の症状をお持ちの患者さんを多く見させていただいていますので、私なりの変形性膝関節症の患者さんの経験から素直に話を進めていこうと開き直り始めてきました（特にTVだからって、いい事だけ言っても、嘘っぽいね）。

1週間前に最終打ち合わせということで、小松整形にNHKのディレクターの小林さんが来られて、私の話したい内容のスライドをお見せして、写真やビデオを使って、できるだけ視聴者の目に訴えたいと要望しました。

2日前に番組の実際の流れを分刻みで作られた台本がメールで送られてきました。写真、ビデオは使ってもらえましたが、2、3納得できない部分を指摘して本番、当日を迎えました。

平成19年3月8日、当日午前11時30分からの生放送なので、10時30分頃に来てくださいますとのことで緊張しながら、家から5分程度のNHKのスタジオへ車で向かいました（余談ですが、実家の北茨城から母親が、冥土？の土産にと息子のTV出演にちゃっかり観客しに来てました）。スタジオにて、若い数人の集団が円陣を組んで、何か打ち合わせ中で小林さんが別室に案内してくれました。落ち着かない私は部屋から出て、天然水を自動販売機からゲットして、のどの渴きを癒しながら、スタジオ風景をながめていました。美人アナウンサーとバリバリのマネージャーみたいな女性に挨拶をし、台本を元に、まずリハーサルをしました。（始まる前にカメラマンのお兄ちゃんに、くれぐれも私の後頭部の髪の毛の薄い部分が目立たない角度からお願いしますね、と笑顔でしたが本気でお願いしました。が、この願いは全く彼には届かなかったようで、本番のビデオを見ると、私から見れば、これでもかという位に後頭部の輝く部分にライトが当てられたのであります。）

リハーサルは私がアナウンサーにアドリブの冗談を振ったりしていたら、14分かかってしまい、マネージャーのお姉さんから、省略できるところは削って11分にしてくれと本番15分ほど前に要求されました。後で振り返ると、確かにNHK茨城『わいわいスタジオ』という約25分番組は私一人の番組ではなく、偕楽園の宣伝の商工会議所のおじさん、生け花を紹介するご婦人方、更にはつくば、県庁などのサテライトスタジオからの中継をする時間も入っており、11分は当然のことでした。

本番1分前、30秒前、10秒前と書いた紙を次々と、私の前にマネージャーが差し出し、本番は始まっていきました。

通所リハビリテーションすだち 一周年を迎えて

こんにちは。通所リハビリテーションすだちです。

昨年5月に開設して、早いもので1年が経ちました。開設当初の5月は利用者ゼロで、小松整形外科医院に通院される皆さんや、地域の方々に来ていただいて、すだちを紹介する日々を送っていました。6月に利用者1名からスタートして、今では24名となり、毎日5～8名の皆さんと過ごしています。56歳～88歳の方が、病気や怪我、少しずつ衰える体の変化など、それぞれの生活での苦労や悩みに対して、それぞれの目標を持ち、一日を通したリハビリメニューに取り組んでいます。ここで改めてすだちの紹介をしたいと思います。

心と心のふれあいを大切に

定員20名の少人数制

畳などの在宅に近い環境

利用者や職員が家族のように支えあう

生活の中でできる運動

それぞれの目標やリハビリ内容は、個々の「望む生活」に合わせて作成し、利用者自身が主体となって、自ら積極的に目標に向かえるようサポートしています。



竹を使用した床に大きな窓から暖かい日差しが差し込む明るいホール、広い室内で床暖房を完備した浴室など、当事業所で利用者が快適に過ごせるような建物を心がけました。



リハビリ



レクリエーション



理学療法士が、個々の生活機能低下に対応したリハビリプログラムを作成し、専門的な機能訓練に加え、在宅生活を意識した畳での具体的な動作指導や、トレーニングなどを行います。

午後に行うレクリエーションは運動に関わるテーマを持って、楽しみながら取り組めるよう工夫しています。

ご飯がおいしい。ここに来ると元気になれる！

長年の病気で、歩行がふらふらしていました。「病は治せないが力はずきます」の言葉に、半年のリハビリとトレーニングにより、足がしっかり地に着き転ばなくなりました。

ここでは治療だけでなく、こういう事をするとうなる理屈が分かるから頑張れる。



理学療法士 端崎 夏紀